

# 平成23年度愛知県がんセンター公開講座（第3回 平成23年8月6日）のご案内

## 講師からのメッセージ

### 「肺がんを予防する」

治療技術、診断技術の進歩により肺がんの治療成績は改善傾向です。しかしながら、他のがんと比べると、必ずしも満足のいく状態ではありません。当然ですが、ならないに越したことはない病気です。これまでの疫学研究により、肺がんの危険因子、予防因子が明らかになってきています。本発表ではそれらの因子の肺がんのリスクへの影響の大きさをご紹介します、リスクを下げるためには何をすべきか、ということをお話致します。

疫学・予防部 室長 松尾 恵太郎

### 「肺がんの早期発見と診断」

肺がんは、患者さんの病院来院時にはすでに進行している事が多く、いかに早期に発見するかが重要と考えられています。通常、肺がん検診では胸部X線写真、喀痰検査が用いられ、病院では胸部X線写真、CT検査、喀痰検査、気管支鏡検査、またPET検査などを用いて診断しています。肺がん基礎研究の進歩により、最近では肺がんの遺伝子異常の状態により治療効果が異なることが明らかになり、単なる肺がんの診断に留まらず、治療法の選択に向け遺伝子検査を行い薬剤を選択する肺がんの個別化医療が行われています。

呼吸器内科部 部長 樋田 豊明

### 「肺がんの最新治療」

肺がんは日本人のがん死亡原因の第一位で、年間7万人近くの方が亡くなっています。予防のために、まずは禁煙運動を更にすすめることが重要です。比較的早期の患者さんは手術によって治癒させることが可能です。放射線治療の分野では粒子線や定位放射線治療といった最新の機器が開発されています。しかし、肺がんが難治である理由は、脳、骨などの遠隔の臓器に転移しやすいため、このような場合は薬物による治療の対象となります。ここ10年の肺がんへの理解がすすんだおかげで、肺がんの組織型や遺伝子のタイプによって治療を選択し、最小の負担で最大の効果をあげるように大きく変貌しつつあります。

副院長 兼 呼吸器外科部 部長 光富 徹哉

### 「肺がんの緩和ケア

#### ～患者さんから教えてもらったこと～

3年ほど前に、肺がんの患者さんから病気の経験をお聞きする機会をいただきました。

患者さんは、病気になったことで生活が一変し、様々なつらさや悲しみを経験しておられました。緩和ケアは、肺がんと診断された時期から受けることができ、患者さんが前向きに生きられるように支えることであると考えます。今回の講演では、肺がん患者さんからお聞きしたお話を交えながら、緩和ケアとは何か、どうやって受けるのかをお伝えいたします。

看護部（がん看護専門看護師） 西尾 里美